

ジョン・デイツキンソンのえらんだ道

——アメリカ獨立革命における一穩健派について——

今 津 晃

【梗概】

「忘れられた愛國者」という名の下に近時アメリカ獨立革命の研究者たちによつて再發見されつつある保守的ホイッグの代表ジョン・デイツキンソンが、獨立宣言という事態に處していかなる生き方をえらんだかを見ようとする。穩健派である彼は獨立と調停、デモクラシイと紳士政治、をめぐる對立の眞只中にあつて、本國との和解による自由の獲得を主張した。彼はアメリカの權利を守る點では決して急進派に劣らなかつたが、その方法において相容れず、究極は敗北した。だが彼は敗北を通じて愛國者としての新しい道を決意し、一兵士として獨立戰爭に参加した。このような轉換に對する彼の良心の葛藤をうかがうとともに、新しい決意においてもなお克服しえなかつた保守的側面、つまり紳士政治への信念によつて、ついに彼がアメリカ民主主義の發展からとり殘されてゆく次第を見ようとするものである。

(一)

一七七四年三月に發せられた英本國の強壓的諸法 (Intolerable Acts) ⁽¹⁾ が、アメリカ獨立革命をうながした諸原因・諸事件のなかで重要な位置を占めていることは周知のところである。これから派生した事件

(五月十三日には新知事ゲージ將軍がマ灣に上陸し、同日ボストンでは本國との通商斷絶を各植民地に通告・要請するための町總會が開かれた) を直接の機會として、最上級の有能な人々が集い、二年に垂んとする論議を経てついに本國からの分離を決定した大陸會議が開催されたのである。

一七七四年十一月二十九日、ウェストミンスターにひらかれたイギリスの國會では、はやくもアメリカの獨立が實現可能の問題として公然と論議され注目をひいた。ところがその一ヶ月前に開會となつた植民地の第一回大陸會議（九月五日——十月二十六日）では、英帝國からの分離を求める提議は一つとして聞かれなかつた。その會議が二年近くの後には獨立を聲明した。結局は満場一致の宣言となつたが、その前夜まで獨立をめぐるアメリカ人の世論、したがつて大陸會議の意向は一致しなかつた。それどころか獨立の宣言そのものが、トリーイとホイッグとの黨派的對立を一段と明確化したものでもあつた。今日確認されている事實によれば、「紛争が國會の侵害をめぐる法的論争にとどまるかぎり、植民地人の感情は本國政府の政策に反對する」という點において、一致するものがあつた。しかし母國との植民地的關係を絶つことが問題となつたとき、北部や中部植民地の upper 階級は比較的少數のものが獨立派に參加したにすぎなかつた。穩健派の人々、調停論者たちは二つの極に粉碎され、トリーイは數においても勢力においてもいちじるしく増大した⁽¹⁾。この二年近くを通じて或るときは急進主義が強く擡頭し、或るときは穩健派が制勝し

つゞけるかにみえた。このような起伏の多い對立のなかから、植民地がどう獨立へ傾いていつたかを概観するのが小稿の目的ではない。獨立をめぐる紛争が、民衆の政治を意圖するものと「紳士」の政治を守り抜こうとするものとの社會的對立を反映するという事態にあつて、自己の信念——本國との和解——に忠實であろうと努めた人、自己の主張が現實の前に次第に支配力を失ひ、究極は敗北し、その故にかえつて悲しい慰めと新たな決意とを克ちとつた一愛國者ジョン・ディッキンソン（John Dickinson）のえらんだ道を辿るとともに、新たな決意においてもなお越ええなかつた保守的側面が残されていた事實を指摘することによつて、アメリカ獨立革命史の一エピソードをうかがうにすぎないのである。

(II)

一七七六年六月十日（月曜）、一兩日前に提出されたりの獨立決議文を審議する會合が、午前十時から夜の七時まで続けられた。武力衝突はすでに一年以上も前から始まつていた。國王への再度の「請願」も、國王の眼を通ることなく却下された（一七七五年二月二日および七日に、マ

サチュセッツは叛亂状態にあるとする提議がそれぞれ下院と上院とで可決され、十一月七日と十六日には、第二の請願も兩院によつて却下された。本國識者の和解案も否決された、そして植民地軍のホープであつたモントゴメリー將軍は戦死し（十二月三十一日）、「コモン・センス」は公刊されて異常な興奮を呼ぶとともに、急進派に都合のよい理論的根據をあたえ（一七七六年一月八日）、イギリス以外の國との貿易再興のために、諸港は開放された（四月六日）。またヴァージニアでは、新政府建設の意圖をもつたかの「五月決議文」が可決された（十五日）。事態は和解の段階を越えて、武力による獨立というどたん場に到達したかのようにみえた。ここにおいて急進派は斷乎として次のごとく主張した。本國は植民地の保護を止め、植民地人の財産を奪うべきことを命令した。アメリカ船舶の拿捕も合法とされ、むしろ督勵された。とすれば獨立以外になにが残されているか。その獨立をなぜ承認しないのか、と、⁽¹⁾

こと此處にいたつて、ディッキンソン、ウイルソン、リヴィングストン、ラットリッジらによつて代表される穩健派も、和解の道に關して絶望に近い氣持を徹うことはできなかつた。今や彼等はイギリスとの和解を望んでいるので

ジョン・ディッキンソンのえらんだ道（今津）

はないこと、誰もが理解するようにそれは不可能であろうこと、を承認するところにまで後退しなければならなかつた。にもかかわらず彼等はすべて、今はその時ではないという見解を固持した。イギリスからの正面攻撃を前にして統一のない植民地が獨立を宣言することは、狂氣の沙汰と考えられたのである。現に中部植民地全體が獨立には反對であり、サウス・カロライナも同様な意圖をもつていた。だから彼等はいふ。輕卒な暴力的煽動者が獨立を絶叫し、或る植民地がこれに従わない場合——當然豫想される場合——を考えてみよ。このような状態の植民地とどうして外國が同盟しようか。それどころかヨーロッパ諸國はアメリカの分裂がさらにはげしくなることを喜ぶであらう。諸國は結局イギリスに味方し、アメリカをスペイン、フランス、イギリスの各領土に分割せしめようであらう、と。⁽⁷⁾

彼等穩健派はアメリカの自由を守るといふ意圖において、決して急進派に劣るものではなかつた。しかし自由を守る方法において相容れなかつた愛國派の二つの陣營は、はげしく對立して譲ることがなかつた。こうして六月十日の會合は異常な興奮をまき起したのである。

このとき、比較的口數のすくないサミュエル・アダムス

が立上つた。マサチュセッツ通信委員會の設立當初からその委員であり、各植民地の事情に詳しいアダムスが、民衆の世論を盾にとつた有名な演説については、ここでは述べない。ともかく彼のあたえた感銘は大きかつた。獨立の承認と否認とのあいだを彷徨していたノース・カロライナ代表のヒュースは、はつきりと獨立を決意した。⁽⁸⁾ディッキンソンの同僚であり、本國との和解を確信していたペンシルヴァニアの代表モートンは、會議がおわつたとき新しい疑問で放心した人のように立去つた。⁽⁹⁾モートンの信念の喪失はやがて七月二日の運命的な日に、滿場一致の宣言を實現する上の貴重な一票となるのである。

六月十日の會合の結果、獨立決議文の最後の審議は七月一日におこなうことが可決された。フェアヒル（フィラデルフィア郊外數百エーカーの土地。フィラデルフィア觀光地の一つ。ディッキンソンの所有地）のわが家に歸つたディッキンソンは、この三週間をかけて、彼の政治生活のうち最も重要な演説となるべき草稿の作成に専念した。そしてついに六月三十日（日曜）の夜はすぎた。⁽¹⁰⁾當時、デラウェア河口およびニュー・ヨークに碇泊中のイギリス戦艦からイギリス兵が上陸を開始したという噂が、フィラデルフ

シアの街々に擴がりつつあつた。

七月一日、午前九時から大陸會議は開催された。ディッキンソンは直ちに立上り、丹誠こめて作成した草稿を讀み始めた。彼は將來における獨立に反對ではない、と前置きした。しかし「今はその時期ではない」という確信はゆるがなかつた。彼はいう。一國民が大した戦鬭も經驗せず、一つの同盟國もない状態で、獨立をとげた實例は史上に會て存在しない。今なお多いイギリスの友人たち（ホイッグの一派）は、分離という究極手段によつてアメリカから離れるであらう。アメリカを自立させるに必要な三つの条件のうち、連合政府の樹立こそ第一義とされなければならぬ。この政府の權威によつてこそ、外國との同盟第二の條件が招來されるのである。そしてそれから——それからのみのことであるが——、獨立（第三の條件）が考慮されるべきなのである。外國からの援助は、決して即時獨立を宣言することによつて得られるものではない。外國の援助は、軍事的成功によつて國家の實力が示されてからはじめて達せられるものである。植民地個々の政府が未だ確立されず、植民地間の境域さえも十分に決定されていない時に於いて、そして植民地全體の協力が可能性をさえもたない

時において、外國との同盟を求め、イギリスという強大な國家に挑戦することが果して正しいであろうか。獨立のとき重大問題への一步は、ひたすら慎重を期した上で踏み出されるべきである、と⁽¹¹⁾

この演説は實に入念に構成され、情熱をもつて吐露された⁽¹²⁾。そして最後にディッキンソンが會堂全體をみわたしたとき、立上つて應答する者は一人もなかつた。⁽¹³⁾ジェファースンもフランクリンも一語も發しなかつた。こうしてしばらくして、誰かが後に續くであろうという期待からジョン・アダムスが語り始めた⁽¹⁴⁾。

アダムスは自己の生涯においてこの時ほど大ギリシア人やローマ人の雄辯を望ましく思つたことはないという前置から出發して、もし獨立・連合・外國の援助の三條件が同時に招來されるものでないならば、獨立こそ第一に來たるべきものでなければならぬ、それこそアメリカの取るべき不可欠な第一歩である、と論じた⁽¹⁵⁾。この席上、語つた多くの人々の記録は存在しない。しかし結局、六月十日の約束に従つて獨立是非の問題が投票により決せられることとなつた。

投票の結果、九つの植民地は獨立に賛成であり（ニュー

ジョン・ディッキンソンのえらんだ道（今津）

・ハンプシャー、マサチューセッツ、ロード・アイランド、コネチカット、ニュー・ジャージー、メリーランド、ジョージア、ヴァージニア、ノース・カロライナ）、二つは反對であり（ペンシルヴァニア、サウス・カロライナ）、他の二つ（ニュー・ヨーク、デラウェア）は棄權した。そこには満場一致というものは存しなかつた。しかし獨立の主張が壓倒的であつたことは、もはや明白であつた。しかも議長ハンコックが多數決を承認すべきか否かを提議したとき、サウス・カロライナ代表ラットリッジの發言が急進派をより有利にした。つまりサウス・カロライナは獨立に反對である、だがもし獨立を満場一致で宣言するというならば、同植民地は立場を變えるであろう、と⁽¹⁶⁾。この發言が満場一致の宣言の可能性を示した最初であつた。こうして決議は明七月二日にもちこされることとなつた。唯一の獨立反對植民地として殘されたペンシルヴァニアにおいて、代表の若干が思想的轉換を上げつつあつた事實に徴すれば、七月二日に獨立が決定されるであろうことはほとんど疑いえない事實となつたのである。

(三)

ディッキンソンにとつて七月一日の夜は、まことに眠られぬ夜であつた。⁽¹⁷⁾ 彼にはこの二年近くのあいだ大陸會議における自己の政治的活動や、若い法律家・政治家として踏みだした遠い過去が次々と去來した。そして曾ての親友でありやがて宿敵となつたジョン・アダムスとの決裂の當時が、ことさら強く想いだされた。

ディッキンソンはメリーランド海岸沿いの大地主の家に、熱烈なクエーカー教徒を母として生れた。⁽¹⁸⁾ 曾ては法律家であり後に大地主となり、家長としての威厳を信條とするとともにまたそれを失わなかつた父サミュエルの下に、彼は嚴格な家庭教育をうけた。規則正しい兩親の薰育とさわやかな田園生活によつて、ディッキンソンは意志の強いしかも繊細な人間として成長した。⁽¹⁹⁾ また父は子供の教育のためにドーヴァー（デラウェアの低地方）に移つた。ジョンはそこで多くの有名な公人を出したフランシス・アリソン博士の學校に入り、次いでフィラデルフィア大學に進んで法律を専攻した。卒業後一時或る法律事務所勤務したが、やがてロンドンのミドル・テンプルに留學した。彼がロンドンに滞在した三年間（一七五五年——五七年）は、彼の嗜好と思想とに大きい影響をあたえた。奇智、才

能、快活、大志、種々の意味のせり合いなど、それらすべての中心地であるロンドンにおいて、彼は政界や文學界の大立物と識り合いになるとともに、イギリス憲法の偉大さにいちじるしい尊敬を拂うようになった。⁽²⁰⁾ 彼が急激な變化というものに好感をもたず、また英帝國に尊敬と愛着を抱くにいたつた理由は、その生れもさることながら今一つは以上の體驗にあつた。そして一度びフィラデルフィアに歸るや、その才能と學識とまたその富とは、彼を一躍法曹界および政界の有名人に押し上げた。當時ペンシルヴァニア議會の長老であり最も富裕な商人の上人であつたイザーク・ノリスと知り合い、その娘と結婚し（一七七〇年七月）、妻の財力でフェアヒルに居を構えたことも、彼をいよいよ名士とした。

印紙稅法が本國と植民地との關係を險惡化したとき、ディッキンソンの明晰な頭腦は一際目だつものとなつた。彼はすべての人が讀み且つ理解できる平易・簡潔な文章において、植民地人に訴えた。「印紙稅法會議の諸權利の宣言」(The Declaration of Rights of the Stamp Act Congress) を作成したのも彼であつた。そして一七六七年——六八年に彼が世に問うた「ペンシルヴァニア農民の書簡」

(Letters from a Farmer in Pennsylvania to the Inhabitants of the British Colonies) はたちまち十三植民地に擴がつた。當時ロンドンに在つたフランクリンは領主政治・課税・軍務・議會への代表・フロンティアなど紛糾を告げていた諸問題をめぐつて、ディッキンソンの反對者であつたにかかわらず、「書簡」をロンドンで再版した。「書簡」は國會の兩院でも參考にされ審議された。革命運動時代の植民地においてペインの「コモン・センス」を除いては、これほど海外に多くの讀者をえた著作はなかつたといわれる。⁽²¹⁾ところでディッキンソンの愛國的精神は、東印度會社の茶をめぐる紛争の際にも發露された。一七七三年十一月に書かれた「茶税に關する二つの書簡」(Two Letters on the Tea Tax) は、論調のはげしさにおいてサミュエル・アダムスがペンをとつたかと思われるほどであつた。⁽²²⁾こうして一七七四年十月十七日ペンシルヴァニア衆民の世望をにない、やや遅ればせに大陸會議への代表となつたディッキンソンは、すでにアメリカ第一等の名士となつていた。曾て彼はマサチュセッツからの廻狀を受諾し本國への抗議を激勵するための演説を依頼されたとき、積極的に動く氣持はなかつた。⁽²⁴⁾ところが大陸會議の代表となつた彼

は以前のディッキンソンではなかつた。本國との調停は達せられるであらう、それゆゑ全力をもつて和解という目的に邁進するのが大陸會議の使命であり眞の愛國者の義務であることを、ディッキンソンは確信したのであつた。七四年と七五年との二回にわたる「國王への請願」は、彼の筆になつたものである。⁽²⁵⁾

ところでマサチュセッツを代表するジョン・アダムスとペンシルヴァニア代表のディッキンソンとは、一瞥以來友人となつた。アダムスはディッキンソン夫妻とペンシルヴァニアの農村地方に遊ぶこともあつた。第一回大陸會議の時期を通じて友情は次第にこまやかとなり、二人はアメリカの權利という同一の問題を語り合ひ、アダムスは共鳴することができた。アダムスは次のように日記にしたためている。「愉快きわまる午後をわれわれはもつた。まことに氣持のよい交際であつた」と。⁽²⁶⁾したがつて大陸會議がディッキンソンの指導下にあつたことは想像に難くない。第一に富裕な地主である彼は、ヴァージニア、メリーランド、デラウエア、ペンシルヴァニアにそれぞれ利害關係をもち、商業に明るく、商人がビジネスの促進劑と考えていた紙幣の唱導者であり、商業的利益のスポークスマンであつ

た。第二に彼は高度に専門的な知識を身につけ、政治學や歴史學にも明るかつた（プリンストンで H. D. を受く）。第三に彼は長い政治生活の體驗をもち、クエーカー教徒や富裕な貴族主義者・保守主義者からの支持をえていた。第四に彼は最高の名聲を博したパンフレットの作者であり、その上にお人柄であつた。「彼の噂を耳にした人は、彼に會つたとき失望しなかつた。つまり彼は健全な思想の持主であり、明らかに正直な人であり、指導者に仰いでよい人であつた」⁽²⁷⁾、いわば「紳士の社會のなかの紳士」であつた。⁽²⁸⁾しかもなお彼は、「平和を欲する人、それを達成するためには自己のすべてを傾ける人、また目的は必ず達成しうると考えた人」⁽²⁹⁾であつた。

しかし大陸會議はいつまでも「ディッキンソンの會議」ではなかつた。武力衝突があつてからは、新しい指導力の必要が痛感されてきた。ディッキンソンが説き續けた本國との妥協案は、武力闘争の繼續という現實に直面しては、もはや指導性をもちえなくなつた。なにか新しい秩序、人が曾て體驗しなかつた新しいものが存しなければならぬ。こうしてティコンデロガの占領後、より多くの軍需品の必要という事態を前にして、再び國王に「請願」を送る

べきか否かが問われたとき、ついにディッキンソンとアダムスとの友情は決裂するのである。

たしかに個人的關係にとどまるかぎり、この二人のあいだにはなお共感の存すべき理由もあつたであらう。「請願」をめぐつて對立したときでも、アダムスはディッキンソンの立場を諒解した。ディッキンソンの支持者であるクエーカー教徒が、そしてまた賢母・賢婦人である母や妻が、彼を急進主義に走ることから押し戻そうとして、日夜哀願または威嚇していることを、アダムスはトムソン（ディッキンソンの友人にして親戚）を通じて、ディッキンソンの家族や友人たちからの抗議を聞いたのである。「ジョニイよ、お前は絞首刑にあうだろう。お前はお前の良妻を未亡人にし、お前の可愛い子供たちを孤兒や乞食や無頼漢につき落すだろう」と、⁽³⁰⁾アダムスは個人として、曾ての友人の立場に同情を禁じえなかつた。しかし個人として同情することとは、公人として共鳴することと同じではない。ついに兩者——穩健派の指導者と急進派の闘將——とのあいだに、決裂が起つたのである。

それは一七七五年の或る夏の日、「請願」の問題が紛糾を告げているときであつた。會議室から外出したアダムス

(四)

の後をディッキンソンが追つた。ディッキンソンの顔は平生より蒼白であり、聲には落着きがなく、明らかにものすごい怒りを含んでいた。あたかも先生が生徒に對するよう⁽³²⁾に、彼は切りだした。「君たちニュー・イングランド人がわれわれの調停對策に反對するのはなぜか」「氣をつけたまえ。もし君たちがわれわれの和平體制に協力しないなら、私や私の同僚はニュー・イングランドの君たちと決裂し、われわれ獨自の立場から反對を続けるであらう」と。相手が興奮しているのとは逆に、アダムスはきわめて冷靜に答えた。「會議が判決しなければならぬ。そしてもしそれが私に反對の聲明をするなら、私は従わねばならぬ。同様にもし貴下に反對の決議をするなら、貴下は黙諾すべきである」と。⁽³⁵⁾

その後、二人のあいだに個人的な言葉は二度と交わされなかつた。⁽³⁶⁾「會議の席上では、いつもの率直さと氣輕さともつて、公けに一切の問題を討議し續けた。しかし友情や交際は……永久に失われた」。「請願」が決議されてアダムスが負け、ディッキンソンが勝つたという事實が後に續いても、二人の舊情は暖められなかつた。⁽³⁸⁾

一七七六年七月一日の夜、敗北が明白となつたディッキンソンにとつてアダムスとの決裂は消すことのできない想い出であつた。あの時以來、二人は個人的に二度と言葉を交わさなかつた。そしてあの時はディッキンソンが勝ち、アダムスが屈したかにみえた。アダムスは約束どおり「國王への請願」に署名した。そして今は？ ディッキンソンが慎重の限りを期して作成した第二の「請願」も、英本國において、「言葉の柔かいのは最大の反逆的計画をかくすために故意に用いられたものである」として、一擲された。⁽³⁹⁾ ウイルソンやディッキンソンを中心に結成された獨立反對委員會（一七七六年一月、獨立に反對の三植民地——ペンシルヴァニア、ニュー・ヨーク、メリーランド——の代表および仲間割れのしたノース・カロライナ代表から成る）が植民地の連合を提議した直後には、⁽⁴⁰⁾他方で諸港が開放され、ヴァージニアでは「五月決議文」が作成された。そしてついには七月一日の事態を招いた。結局大陸會議は、正しかつたのはアダムスであつてディッキンソンではないということを決定する前夜にまで進んでいたのでは

る。

それではディッキンソンは敗北のしるしとして、彼が最後まで反対し続けた即時の獨立宣言に署名することができたであろうか。アダムスは約束どおり會議の判決に従った。ディッキンソンは約束もしなかつたが、同時にそれは今となつてどうてい彼のなしえないところでもあつた（事實ディッキンソンは七月二日の會に出席しなかつた）。しかし彼には自己の名をかけてなしうるところの、またなそうとするところの今一つのことがあつた。まず彼は妻や母に今日會議で決定されたこと、明日當然實現されるであらうところのこと、を語らねばならぬ。そしてさらに彼は、この事態に處すべき自己の決意のほどを打明けねばならぬ。恐らく妻や母は、彼の最後の決意がなんであるかを多少は氣づいていたかもしれぬ。しかし七月一日の夜に彼が最後の結論を下したということは、明らかに彼女らのあずかり知らないところであつた。なぜならその結論は、七月一日の大陸會議における投票の結果をまつて、始めて確固たるものとなつたからである。これまでも彼女らの抗議はきつかつた。今や彼の決心のほどを聞いて驚愕するであらう彼女らの反対は、一段と大きくなるに違いないのであ

る。しかし彼女らはそれを知らねばならぬ。彼はそれを承諾させねばならぬ。それが敗北した穩健派のとるべき究極の愛國的義務である。彼は召使を呼んで次のことを命ずるであらう。軍服を出し、それをカバンに詰め、劍をとり出し、馬の手入れをせよ、と。彼は机の引出しを開き、書類を整理し破棄し、長い不在の準備をしなければならぬ。その不在こそ、或は永久のものとなるかもしれないのである。⁽⁴¹⁾

というのは、ディッキンソンはフィラデルフィア近郊の空地で訓練を積みつつあり、近くニュー・ヨークのワシントン軍を支援するために出發の準備をしていた一部隊の指揮官なのであつた。彼は大陸會議に戻るつもりはなかつた。愛國者としての道を會議においてではなくして戰場に見いだすことが、主張の容れられない彼のとるべき唯一の信念の行爲であつた。フェアヒルにおいて最後の演説の草稿に専心したときでも、彼はしばしば軍務に想いを轉じないわけにはゆかなかつた。⁽⁴²⁾すでにすぐる二月に彼は最古參の大佐、増援軍第一部隊の指揮官として、非常の場合には武器をとることを決心し、事實同月十五日（火曜）にはニュー・ヨークに向つて進軍する予定になつていた。⁽⁴³⁾その行

進は都合によつて延期され、またディッキンソンは穩健な解決の可能性に絶望しなかつたが、彼が非常の際に軍人として活躍を期待されていたことは、論敵ジョン・アダムス自身がこれを認めるところであつた。⁽⁴⁵⁾指揮官である彼は同時に大陸會議への代表として政務に追われ、軍隊の指導には怠りがちのときが多かつた。果して自己の部隊（七二〇名）⁽⁴⁶⁾は準備ができたか。彼は軍隊のためにベストをつくしたか。どこまでも穩健な立場からアメリカの權利を守り抜こうとしたディッキンソンに、折にふれて想いだされたこと、そのことが敗北した後の彼の心を占めるにいたつた。

彼は獨立に反對の最後の聲をしぼつた。彼はどうしても獨立に賛成の票を投ずることはできなかった。が同時に、はや、敢て獨立に反對しようとは思わなかつたのである。彼と同じ信念をもつロバート・モリスも恐らく二日の會議には出席しないであろう。同じペンシルヴァニアの代表で、同じく穩健派であつたウィルソンも、七月一日の投票では立場を變えた。⁽⁴⁷⁾モートンもその後を追う様子がある。彼等をして自己の良心の命ずるままに任せよ。イギリス軍はデラウエア河口およびニュー・ヨークに上陸を開始したという。とすれば長大息し後悔する餘裕はないであろう。ただ

ジョン・ディッキンソンのえらんだ道（今津）

行爲の時間のみがあたえられているとすれば、主張の容れられない愛國者のとるべき道、そして特に指揮官である自己自身にとつての途は、進軍以外にはないであろう。

ディッキンソンは書類を整理してゆくにつれて、大陸會議を牛耳つた時代の華やかさ、「農民の書簡」への大喝采、前途を祝福されつつ若い法律家・政治家としてふみ出した遠い過去に想いを馳せた。そして突如として彼の心のなかに、悲しみやにがさではなくて安堵と愉悅とが潮のように押し寄せたのであつた。それこそ、自己の正しいと思う主義のために全力をつくしたけれども、今や一切の公けの責務は自己の手をはなれたという安心であり慰めであつた。翌日獨立宣言を決議するために大陸會議へおもむく代表たちは、ジョン・ディッキンソン、クエーカー教徒の息子、大財産家の子供にしてその主人、調停論者の副將が戦場に向う部隊の先頭に立つて行進するのを見るであろう。⁽⁴⁸⁾彼もまた馬上から彼等を見おろすであろう。こうして過去への回想や書類の整理などによつて、七月一日の夜はディッキンソンにとつて眠られない夜であつた。

七月二日が来た。午前九時から會議は始まつたが、豫想どおりディッキンソンは缺席した。⁽⁴⁹⁾會議の書記トムソンの

呼ぶ名に従つて、北の植民地から次々に投票がおこなわれた。ニュー・イングランド植民地はすべて獨立に賛成した。新しい指令の來ないニュー・ヨークは棄權した。ニュー・ジャージーは全員賛成であつた。そして次にペンシルヴァニアの番となつた。フランクリンは當然賛成した。ハンプリイは反對した。長い疑問を解決したウィルソンは賛成した。ウイリングは反對した。残された一票は？ モーソンの番であつた。アダムスの演説を聞いた頃から動搖し續けていた彼は、その時になつても決心がつかなかつた⁽⁵⁰⁾。どの人も沈黙していた。ついに彼は獨立に賛成した。ペンシルヴァニアは獨立に同意したのである。獨立へのこの潮流の前に、程度の差はあれ他の六植民地も従つた。こうして棄權したニュー・ヨークを除くすべての植民地が、歩調を合わせた。満場一致である。ここにこそ、イギリスや諸外國への解答があつた。イギリスは十三の植民地ではなくて一つの國と戦わねばならぬ、諸國はイギリスの植民地ではない新しい國家と同盟しうる、という聲の發せられるべき所以があつた。

その國家の運命をかけた戦闘に、ディッキンソンが参加したのであつた。彼は敗北後ただちに部隊を率いてエリザ

ベスタウンに進軍した。また特別軍をつくつてブランドイワインの戦闘にも加わつた⁽⁵¹⁾。たしかに彼は獨立反對派を指導したことによつて、曾ての名聲を失つた。兵士となつた彼の行爲は、曾ての同僚や支持者たちにとつては欺瞞であり卑怯であるかにみえた⁽⁵²⁾。しかしこのような非難を正面にうけながら、彼は次のごとく所信を述べた。彼はその一生をば「私に對する憤りの眞只中にあつて、なお私が同胞として尊敬せずにはいられないところの、それらのつれない同胞の防禦と幸福」のために捧げるであらう、と。彼は穩健主義者ではあつた。だが彼はなによりまず愛國者であつた。その點において、彼は同じく保守主義に立つトリーイと峻別されるべき所以があつた。トリーイとディッキンソンなど保守的ホイッグとを主として區別するものは、トリーイが獨立宣言後もなお斷乎として獨立を否認し續けたのに對し、後者は良心のはげしい闘いの後に、自己の運命を急進派とともにしたということである。革命運動は保守的ホイッグにとつては、誤つた方法であると思われたけれども、なお彼等はアメリカの自由を守るといふことにはどこまでも忠實であつた。ディッキンソンのえらんだ道は、そのよい例を提供するであらう。

エンサイクロペディア・オヴ・ソーシアル・サイエンスの一執筆者B・F・ライト二世はディッキンソンを「革命のベン・マン」と名づけたタイラー (Moses Tyler) の説を批判して、「國會の課税權に對する憲法上の反抗という

《革命運動》初期の時代のベン・マン」と呼んでいるし、⁽⁵⁴⁾同じくタイラー説に異論を唱えたパリントンも、「もつと正しい名稱およびもつと事實に即した名稱は、植民地のホイッグの代辯者ということであろう」といつている。⁽⁵⁵⁾なるほど右の三人の見解には若干の相違が認められるであろう。しかしそれらはいずれもディッキンソンの本領をベン・マンにあるとする點において、共通性をもつのである。

またパリントンは次のような斷定を下している。ディッキンソンは餘りにも自説を固執しすぎたため、アメリカ人となることは困難であつた。本國政府の諸政策に抗議しつつなおイギリスに忠誠を示す段階においては、ディッキンソンは代表者であつた。しかし忠誠の告白というマスクを一擲し戰爭する必要に迫られたとき、彼はより活動力のある代辯者に道を譲るべく投げ出された……そして現われた新しい秩序のなかにおいて、恐らく彼は完全な氣易さを感じずることはなかつたであらうし、後悔から免れることもなかつた。

ジョン・ディッキンソンのえらんだ道 (今津)

つた。彼はなお彼が育つた古い秩序のなかの人であつた、⁽⁵⁶⁾と。このようにディッキンソンをもつてベン・マンであるとか、後悔から免れない時代おくれの人であるとかという若干の見解の妥當性を認めながら (後者については次章参照)、獨立戰爭そのものに關するかぎり、われわれはディッキンソンに今一つの特色があつたことを見のがすわけにはゆかない。文筆家である彼は、究極において劍をとつて立つた別の行動人でもあつた。したがつて文筆家として活躍した革命運動の初期だけが、彼の全體をそしてまた彼の本領を語るものでもなかつた。彼は英帝國の臣民である以上にアメリカ人であり愛國者であつた。この愛國者としての性格が、事態の要請につれて或いはベン・マンとして或いは兵士として具現したのであつた。われわれは彼が文筆家であつた時代の活躍や人氣などとは別に、同僚の非難を買ひ名聲を落しながら、なお自己に冷たい同胞の幸福を願ひ、身を戦鬪に投じた不遇のディッキンソンに、新しい意義を見いだすのである。

(五)

このようにしてディッキンソンは良心の闘いを經過した

後に安堵と新たな決意とを克ちとり、同胞市民の防禦と幸福のために戦闘に参加した。彼に關するエピソードの一つは、獨立の宣言が單にトリーイに對するホイッグの勝利を意味するだけでなく、ホイッグの保守派に對するその急進派の凱歌でもあつたことを立證するものである。

しかし、自己の信念に従つて急進派と歩調を合わせ獨立の達成に一役を演じた穩健派の思想と行爲とのなかには、最後までアメリカ民主主義の理念に即應しえない限界が存在していたことを、われわれは見のがすことができない。たしかにディッキンソンは和解の希望を捨てて急進派に與した。だが他方において彼は、獨立運動が社會革命にまで發展し民衆の政治を招來することを極力防ごうとした。彼はアメリカの自由をイギリスから守り抜くという點では急進的となりえたが、合衆國にデモクラシーをとり入れるつもりはなかつた。つまり植民地の繁榮につれて基礎を固めつつあつたアリストクラシーに排戦したのではなかつたのである。上層階級の支配という傳統を守ろうとする限りにおいて、保守的ホイッグはトリーイと共通するものがある。要するに一六八八年の革命を手本にした彼等は、どこまでも「紳士の、紳士による、そして紳士のための」

「安全にして穩健な革命」を期待したのであつた。たとえ(57)ばディッキンソンは大小を問はず不動産保有者に選舉權をあたえよという主張において、多くの無産者の危険な壓力に對抗し秩序を守る上の最上の保障を前提とした。だから「政府は穩健な貴族政治をもつて始まるであらう」という確信は、生涯を通じてゆらぐところになかつたのである。

彼はヨーロッパに存在するデスポティズムに對すると同様に、民衆の政治にはいちじるしい反感と恐怖とをもつていた。(60)いうまでもなく衆愚政治を懸念したからであつた。その意味においては、ディッキンソンをもつて十八世紀的紳士であり、多くの人々の心のなかに動きつつあつた自由主義を理解しえない時代おくれの人とするパリーントンの批判は、當然正鵠をえたものでなければならぬ。(61)

たしかに獨立を圖いとうとするアメリカの内部に社會的混亂が進展したとすれば、それは大事業の遂行にとつてゆゆしい問題であらう。事實ディッキンソンの怖れた社會革命は必ずしも杞憂ではなかつた。民衆の大半は選舉權をもたなかつたし、政治的發言を獨占する商人や地主は戰時利得をおさめ、祖國愛の名において同胞市民を犠牲にしつつあつた。たとえばコネチカットへ逃れたボストンやチャ

イレストンの市民は、地代を倍にした當地の地主のために、
たちまち擄取されるという災害を蒙つた。⁽⁶²⁾一七七六年に一
フィラデルフィア人は、「もし地主や商人による戦時利得が
續くならば、民衆はあたかも東印度會社が貧困な土民にあ
たえたような状態に陥るであろう」ことを予測している。⁽⁶³⁾

ここにおいて農民や労働者はたとえイギリス人やアメリカ
のトリーイに勝つことはできても、新しい同胞の支配者に
よつて抑壓されてしまうであろう危険を感じ、反撃を開始
しつつあつた。一七七六年にはノース・カロライナにおい
て、ホイッグとトリーイとの最初の武力闘争が起つた。ま
たすでに一七七三年の始めには、傭主と被使用人とは決し
て兩立しないものであり、労働者階級は富裕者を不當に膨
張した巨像とみている、という見解も發表された。⁽⁶⁴⁾こうし
て、「代表なくして課税なし」とする主張はイギリスに對
してだけでなく、アメリカ内部にも向けられるべきこと
が、中下層階級から強く要望されるにいたつた。軍隊關係
についてみても、ニュー・イングランドでは將校と兵卒と
の俸給は平等と決定されたが、南部に多數を占める紳士の
愛國者たちは平等の俸給をもつて不正なモボクラシイの實
例と解し、且つ「財をもたない従つて恐らく最も德をもた

ない雜兵が背後から紳士を狙撃するであろう」ことを怖れ
さえしたのであつた。⁽⁶⁵⁾アメリカ獨立革命が或る程度の社會
運動であつたことはジェームソンの勞作以來周知の事實で
あるため、これ以上は觸れることを控えたい。

J・C・ミラー教授はその好著において、獨立革命におけ
る穩健派の役割を次のごとく解している。「獨立戦争が終
るまで保守派は概して民主主義の潮流を抑え、革命をイギ
リスへの抵抗という狭い領域に限定しておくことに成功し
た。自分たちは制限的責務を負うべき革命に乗り出したの
であるという彼等の確信は、一七八二年以前にはほとんど
動搖することがなかつた」と。しかしながら、イギリスへ
の抵抗という狭い領域のなかにあつて、そしてなおペンシ
ルヴァニアという保守主義の牙城において、獨立宣言と同
じ年に、他の地方にはみられない最も進歩的な憲法が作成
された。いうまでもなくそれは東部の支配階級に對する西
部の農民や、職人に同情をもつ人々の勝利、要するにデモ
クラシイの勝利を語るものであつた。ペンシルヴァニア憲
法は次の四條項を明記する。(一)普通選舉、(二)毎年開かれる
一院制の議會、(三)完全な信仰の自由、(四)最高權をもつ議會
の權威を剝奪しえないよう憲法上の諸制限をもつて規定さ

れ強制された二元的行政部、以上である。それこそ、サミエール・アダムスの邦においてさえ實現しえない進歩的なものであつた。ディッキンソンの保守的側面は、彼が急進派に與したと同じ年に、そして彼自身を育てたペンシルヴァニア自體において否定されたのである。

こうしてアメリカ獨立革命における一穩健派ディッキンソンは、イギリスに對する限りは急進派としての道をえらんだ、彼の堅い信念は時と場所と、そしてとるべき立場の異同を越えて、およそ二者擇一に若しむ人々になんらかの示唆をあたえるであらう。しかしながら彼の抱いた「紳士の政治」は、所詮アメリカ史のコースに沿うことはできなかった。優秀なフィラデルフィアの醫者であり戰爭中に軍醫總監として活躍したラッシュは、「アメリカの戰爭は終つた。だがそれはアメリカ革命という偉大なドラマの初幕が降りたことを意味するにすぎない」(意譯)旨を語つてゐるが、その長い革命の歴史——アメリカ民主主義の發展の歴史——の前に、ディッキンソンの貴族主義は當然姿を消す運命をもつたのである。(七・二七脱稿)

①強壓的諸法は一般に (1) Massachusetts Government Act

(2) Justice Act, (3) Quartering Act の三つを指すが (J.

C. Miller, *Origins of the American Revolution*, 1943, (Chronology) それ以前に制定された Boston Port Act と以後の Quebec Act を含めて強壓的諸法と呼ぶ場合もある (Miller, *ibid.*, p. 369)。ところで強壓的諸法が制定され持續された經濟的背景は、以前の植民地諸法律の制定および撤廢の場合とはやや趣を異にする。Stamp Act と Townshend Acts もともに制定後間もなく撤廢されてゐる。それは多くの史家が指摘するとおり、本國政府が植民地人の抗議に屈したからではなくて、どこまでも本國自體の利害から發するものであつた。つまり國會に強い勢力をもつていた商工業者が、植民地の不買協定によつていちじるしい打撃をうけたため、極力法律の撤廢を主張したことに原因する。ところが強壓的諸法の爲合における植民地人の經濟的抗議は必ずしも本國の業者には打撃とならなかつた。それどころか當時本國の貿易はすこぶる活潑であつた。それはスペイン、ロシア、トルコに新市場が開かれつつあつたため、植民地の通商斷絶が苦痛とはならなかつたからである (Miller, *ibid.*, pp. 446—47; A. M. Schlesinger, *Colonial Merchants and the American Revolution*, 1918, pp. 538—40)。 (スペインの場合——對アルゼリヤ戰に備へてイギリス品の需要の増加。ロシアおよびトルコ——一七六八年、第一次露土戰役の開始とポーランド第一回分割の達成とに

原因するイギリス品の需要)。それは一時的なブームにすぎなかつたが、ともかくアメリカ人が予想したような經濟的動搖は本國に起らなかつた。わずかに一七七五年リヴァプールにおいて、若干の水員の一揆があつたにすぎない。このような新市場の開拓によつてアメリカにおける不利益を補つた本國の業者は、ひとめて政府と協調し、政府が反抗的アメリカ人を膺懲するのは正しいという見解をとつた。このことが一つの原因となつて強壓的諸法は存続し、一段と植民地人の反感を煽つた。なお強壓的諸法とイギリスの商工業者との關係については、他日研究發表の機會をえたいと思つてゐる。

②C. A. Beard, *The Rise of American Civilization*, Vol. I, p. 220. *Cornelia Meigs, The Violent Men*, 1949, Chap. I.

③V. L. Parrington, *Main Currents in American Thought*, Vol. I, *The Colonial Mind*, p. 219.

④六月十日の獨立に關する論議はわずかに *Jefferson Notes, Autobiography (Writings I)* に記載されてゐるだけであるといわれるが、史料を入手しえないため *Meigs, ibid.*, p. 207 に據る。

⑤穩健派が彼等によつて代表されてゐたことについては、ラットリッジからジョン・ジェイにあてた書簡(一七七六年六月八日、土曜夜十時記)参照。E. C. Burnett, ed., *Letters to*

ジョン・ディッキンソンのえらんだ道(今津)

Members of the Continental Congress, 1921, Vol. I, p. 477.

⑥すでにレキシントンの闘争を耳にしたディッキンソンは、不安な氣持で次のように問うてゐる。“What topics of reconciliation are now left for men who think as I do, to address our countrymen?” (*Cf. Miller, ibid.*, p. 418)

⑦Meigs, *ibid.*, p. 207.

⑧J・アダムスよりW・ブルーマーにあてた書簡。Meigs, *ibid.*, pp. 209—10より引用。

⑨Meigs, pp. 210—11.

⑩Meigsによれば「天候は雷鳴を伴ひ嵐の氣配をみせた」と(*Meigs, p. 221*)

⑪Meigs, pp. 223—24.

⑫ディッキンソンの演説の見事にうつづは、論敵であるジョン・アダムスが同日サミュエル・チェースにあてた書簡のなかで述べてゐる。「彼は明らかにひじょうな勞力とものすごい情熱とをもつて、自ら期するところがあつた。そしていちじるしく長い且つ彼の雄辯のすべてをしばつた演説において、彼は以前パンフレットや新聞に發表したことすべてを、そして大陸會議において……彼自身および他の人たちによつて語られたすべてを、を結集した。彼は辯論をきわめて巧妙さやかに運んだの

みならず、それに劣らぬ優雅と率直さをもつてしたのである……」(Burnett, *ibid.*, p. 522n.)

⑮ Burnett, p. 522n. (アダムスからチエースにあつた書簡)

⑯ Burnett, pp. 522—23n. Meigs, p. 225.

⑰ Meigs, p. 227

⑱ Meigs, pp. 227—28

⑲ ディッキンソンの母マリイ(後妻)はフィラデルフィアにおける最も熱烈なクエーカー教徒の家に生れ、保守的平和主義を信条とする活動力に富んだ賢婦人として、一生を通じて子供にいろいろの影響をあたえたといわれる(Meigs, p. 126)。現に獨立が既定の事實となつた前後、ディッキンソンが重大な決心をしようとしたとき、母からの強い抗議は彼を心痛させた(Burnett, p. 108n)。クエーカー教徒は彼女を畏敬していたようにである(Burnett, p. 108)。

⑳ Meigs, p. 126. ディッキンソンの性格についてジョン・アダムスは日記に次のように書いてゐる。「ディッキンソン氏はきわめて憤み深い人であり、また快活であるとともに器用な人である」(一七七四年九月十二日の手記。Burnett, p. 29)。「ディッキンソン氏は憤み深い、デリケートな……人である」(一七七四年十月二十四日の手記。Burnett, p. 81)。

㉑ Parrington, pp. 221—22. Meigs, p. 127.

㉒ *Encyclopedia of Social Science* III, p. 133. Meigs, p. 129. これらのパンフレットや文書を通してディッキンソンが

最大の問題としたことは、アメリカの権利を守ることであつた。アメリカにおけるイギリス國會の主権の必要とその事實とを認め(“Farmers Letter.” Cf. Parrington, p. 223)航海法に對しても植民地は子供としてこれに仕へる義務のあることを認めてゐた彼が(“Farmer's Letter.” Cf. Parrington, pp. 223—24) 信頼と愛着をもつ本國に抗議した所以は、本國政府の政策が英帝國におけるホイッグの信條 “no taxation without representation” を侵したという點にあつたことは周知のところである。つまりディッキンソンには次のような不満が存在した。植民地議會以外には内部課税を課しうるのはない。イギリスの國會はたとえ植民地の利益に敵對的ではないとしても、直接の關係者ではない。もし國會に植民地への課税権があるとすれば、植民地人はチャールス王時代の彼等の祖先と同一の立場に立つことになるのではないか。要するに自己自身の財の主人でもなければ自由人でもありえないわけだ、という不満であつた。このような論旨はディッキンソンに創まるのではなく、メリーランドの Daniel Dulany がビットによる印紙税法撤廃演説の際に發したパンフレットに出てゐるといわれる(Parrington, p. 226)。

②②Parrington, p. 228. 今その若干部分をおげれば次のようである。"Five ships, loaded with tea, on their way to America, and this with a view not only to enforce the Revenue Act, but to establish a Monopoly for the East-India Company.....and hope to repair their broken Fortunes by the Ruin of American freedom and Liberty! No wonder the Minds of the People are exasperated.....to a degree of Madness.....Justice seems to have forsaken the old world.....The Rights of free states and Cities are swallowed up in Power.....Are we...to be given up to the Disposal of the East-India Company?"

②③ディッキンソンは一七七四年十月二十五日(土曜)——大陸會議の開會から四十日後——に代表となり、十七日に始めて出席した(Burnett, p. 80)。

②④その依頼は友人にして親戚にあたるトムソンから特に懇請された。この間の事情については Meigs, pp. 16—17 参照。

②⑤ディッキンソンが第一回大陸會議の「請願全體を書いたことは、一八〇四年九月十五日彼から G. ローガンにあてた書簡におうづ明らかである(Burnett, p. 82)。第二回の「請願」もほとんど彼の手になつたものである(Burnett, p. 157n.)。

②⑥Meigs, p. 130 より引用。

ジョン・ディッキンソンのえらんだ道(今津)

②⑧Parrington, p. 221

②⑨Meigs, p. 130

②⑩ジョン・アダムスの自叙傳の1節(Burnett, p. 108)°

②⑪Meigs, p. 133 より引用。

②⑫アダムスの自叙傳(Burnett, p. 108)

②⑬アダムスの自叙傳(Burnett, pp. 108—09)

②⑭⑮⑯アダムスの自叙傳(Burnett, p. 109)

②⑰その後間もなくアダムスは J・ワレン宛てに、自己の積極案をしたためた書簡を送つたが(一七七五年七月二十四日附。Burnett, pp. 176—177)° はからずもそれがイギリス兵の手に歸し、寫しが「請願」と同時に本國に達した。このニュースがフィラデルフィアに達した直後、アダムスは Chesnut Street のディッキンソンに會つた。アダムスは殷勤に挨拶したが、ディッキンソンは全く返禮なく通りすぎた(一七七五年九月十六日、アダムスの日記。Burnett, p. 198)°

②⑱ダートマス卿の嘲笑。Meigs, p. 161 より引用

②⑲穩健派による植民地連合のための報告書はワイルソンによつて作成された。その要旨は、獨立帝國を建設する目的をもつて戰爭を續けることは惡であり否認されなければならぬ、それよりもアメリカを自由にするのが第一である、と云うにある(Journals of the Continental Congress, IV, 141, 146)°

かしその論調には、分離に對する排撃の方がかえつて植民地連合という意圖を壓するものがあつたといわれている(Meigs, p. 177)。

- ⑪妻マリー・ノリス・ディッキンソンの驚愕については、彼女から夫にあてた書簡(一七七六年七月二十九日、三十日および日附なしのもの)(Logan Papers) ディッキンソンの最後の決意についてはトムソンへの彼の書簡(一七七六年八月七日)(Thomson Papers) およびトムソンからの返答(八月十六日)(Logan Papers)が史料として存するといわれるが、そのいずれをも入手しえないため、これらを使用した Meigs, pp. 228—29 に従う。

⑫Meigs, p. 221

- ⑬一七七六年二月十三日ジョン・アダムスから妻にあてた書簡(Burnett, p. 349)° ディッキンソンが軍籍に入つたのは、すでに一七七五年六月フィラデルフィアにおいて募兵がおこなわれた際であつた(Dictionary of American Biography, V, p. 300)° だから恐らく妻や母は早くからディッキンソンの最後の決意がなんであるかを察づけていたと思われる。

- ⑭一七七六年二月十三日リチャード・スミスの日記(Burnett, p. 348)

- ⑮二月十三日アダムスから妻にあてた書簡(Burnett, p. 349)°

「ディッキンソン氏の敏活さと精神とは——それは確かに彼の性格にない、また見事な實例となるものである——高く評價されている。今日の午後ディッキンソン氏は、部隊を整備するために指揮官台に上つた。この部隊整備を彼はひじような熱意とバトスとをもつておこなつた」(Burnett, p. 349)

⑯Burnett, p. 349

- ⑰ウィルソンは六月十日リーの獨立決議文をめぐる會議のときには、まだ獨立に反對であつた。ところが七月一日の會議では賛成した。恐らくフランクリンとともに士民との交渉の委員になり、フランクリンと附合つてゐるうちに啓發されたものと思われる。

⑱ディッキンソンの究極の安堵につづいては、Meigs, p. 280 参照。

⑲Burnett, p. 531 ⑳Meigs, pp. 231—32

㉑Dictionary of American Biography, V, p. 300

㉒Parrington, p. 222 ㉓Miller, p. 497 より引用。

㉔Encyclopedia of Social Science, III, p. 183

㉕Parrington, p. 220 ㉖Parrington, pp. 231—32

㉗Miller, p. 498° なおその若干の實例につづいては、同著同頁参照。保守的ホイッグのこのような革命觀に對して、トリーイは獨立革命がアメリカ内部の社會革命、つまり一般大衆によるアリストクラシーの顛覆をもたらした、トリーイ、ホイッグを問わ

ずあらゆる紳士を打ち倒すであろうと考えた點において、前者とは異なるものがあつた。つまり保守的ホイッグは revolution of limited liability を考え、トリーイは catastrophic theory of revolution をとつた。事實植民地の民主主義への恐怖というものが、トリーイをして母國への愛着を眼にみえて大きくした。なるほど本國の統制政策には好ましくないものがある、しかし本國の權威は高潮しつつあるデモクラシーに對して最高の安全弁となるものである、もし人間の諸惡のなかで最大の二つのもの、すなわち國王の恣意的な行爲とデマゴグの專制とのいずれかをえらばねばならないとすれば、君主のデスポティズムの方が害が少いであらう、というのがトリーイの考へであつた。このような見解はたとえば一七七〇年六月二十五日、*New York Gazette and Weekly Mercury* に發表されてゐる (Cf. Miller, p. 499—500)。

⑧ ディッキンソンは黨派的不安やモノの侵略から秩序を守る最上の方法として、有産階級が政府に指導權をもつことを主張したが、そのために (1) 不動産保有者にだけ選舉權をあたへること、(2) 上院の權限を強化することを不可缺な條件とした (Parrington, p. 230)。とくに晩年のディッキンソンはシェフターソン派に味方した。しかしそれは小邦が大邦に従屬させられるのを怖れたためであつて、シェフターソン流の agrarian

ジョン・ディッキンソンのえらんだ道(今津)

democracy への反感から發したものではなかつたといわれる (Parrington, p. 230)。

⑨ Parrington, p. 231

⑩ ディッキンソンは當時ヨーロッパに存在したデスポティズムを次のように攻撃している「ほぼこの七年のあいだベストの如く荒れ狂うデスポティズムの熱情は、異常な害毒をもつてヨーロッパに擴がつた。そしてついに自由は國王や大臣たちのにくむべき隠謀によつて全面的に舊世界から驅逐された」と (Miller, 以下より引用)。そのこととは恐らくジョージ三世の親政の他に、(1) コルシカが自由のために戦つて、ついにフランスの手に歸したこと(一七六八年)、(2) ポーランドが分割されたこと(一七六八年)、(3) スエーデンがグスタフ三世によつて專政を樹立したこと(一七七二年)などを指すと思われる。こうしてアメリカ人にとっては、アメリカ大陸こそが自由の最後の牙城であるという信念が植えてけられたといわれる (Miller, p. 472)。

⑪ Parrington, p. 231 ⑫ Miller, p. 501

⑬ たとえば Boucher, *A View of the Causes and Consequences of the American Revolution* 6 所説。Miller, p. 500 より引用。

⑭ Miller, p. 503 ⑮ Miller, p. 505

⑯ H. U. Faulkner, *American Political and Social History*, 1937, p. 112. 同じく H. G. オティスが革命時代の舊友にあつた後年の書簡。Miller, p. 505 參照。